

人生の最期を、意志を持って生きる

－ 独居癌患者 A さんの終末期を支えた人たちのインタビューを通して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
宮下 薫

平均寿命が 80 歳を超えた現代社会では、住み慣れた自宅で、終末期の生活を継続することを希望する高齢者は多い。本研究では、独居癌患者の男性 A さんが、「自分の死に方は自分で決めたい。」という意志を持ち、終末期を在宅で過ごした事例を取り上げ、関わりのあった NPO 法人理事長、A さんの生涯の生きがいであった、音楽活動を共に行ってきた仲間たちのインタビューを通して、その終末期を支えた存在を知り、住み慣れた「地」で高齢者が自らの意志を持ち、それを尊重されながら豊かな生活を送るために、超高齢社会で地域に求められるものや、支援する者たちが考えるべきことについて、示唆を得たいと考えた。

A さんの事例からは、専門職の制度に縛られない継続した支援を得ること、自己肯定意識を高められる場を持つこと、そしてそれを共有し合える仲間の存在があることよって、これまでの生き方の延長線上にある、自らが選択する終末期を送ることが可能であることが分かった。また A さんの生活上の困難を、A さん自身が解決できるように手助けを行い、「生」の伴走をしていた NPO は、援助を求める人と支援者やボランティアを緩やかな絆で繋ぎ、地域に変革を促す存在でもあった。しかし制度に縛られないサービスを提供する NPO が、地域のセーフティネットとして存在し続けるためには、財政や人材、理念の共有などの課題も残されている。